
ほのぼの～新月の夜～

非国民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほのぼの〜新月の夜〜

【Nコード】

N1890C

【作者名】

非国民

【あらすじ】

月の出ない夜。それは、人に有らざる者達が集い、宴会を催す日。ほら、聞こえてきましたよ。宴会の声が……。

月の出ない夜、そして人々が寝静まる時間。これは、そんな日に起こる楽しい出来事。

— こつとうやてんない
骨董屋店内 —

「おおい、シナモン。こつちじゃ、こつち。」

茶色いマントに身を包んだ白髪の老人が、ラーメン用の井の縁に座り、緑色の服を着た黒縁眼鏡を掛けた少年に手招きをする。

「あ、玄爺^{げんじい}。お久しぶりです。」

シナモンと呼ばれた少年は、小さなお猪口^{おぶち}（お酒を呑む小さなコップ）を背負い、ヨロヨロとお爺さんの元へと歩いてきた。

「しかし、お前さんの自分で移動できるから羨ましいの……。」

「よつと、玄爺と呼ばれたお爺さんが井の縁から飛び降り、少年の元へ歩いて行く。」

「そうでもないですよ？ これはこれで狭くて窮屈ですし……。それに、移動できるから宴の準備もほとんど僕がしなきゃいけないですしね……。なんなら、その井と替えましようか？」

「はっはっはっ、お前も冗談を言うようになったんじゃなあ。」

お腹を抱え玄爺が笑う。

「たまには……。ですよ。まあ、僕達^{つくもがみ}憑喪神は一度取り憑いたら最後、その品物から10M以上離れられませんかね。」

「そうなんじゃよなあ……。例外は品物が壊れて、縁が切れるしかないんじゃないが……。わしゃあ、この井が気に入っているの……。憑喪神になってそれが一番困つとるんじゃないよ。」

本当に困ってるのかと思わせる様に、がははは。と、玄爺が軽快な笑い声を上げる。

「ん……うるしやいでしゅよ？」

その笑い声を聞き付けてか、レジの右横の棚に飾ってあるコーヒークップから、舌足らずな喋り方をしたピンクの髪のチャイナ服を着た女の子が顔を出す。

「おっ！ ユエルか！ おはよう。」

「あ、げんじいしゃん。おはようでしゅ。それに、シニヤモンも。」

「ユエル、何回言ったらわかるんです？ 僕はシナモンであって、シニヤモンじゃないって。」

シナモンは準備している手を止めると、口を尖らせユエルに訂正を促す。

「はっはっはっ、まあいいじゃないか。まだユエルも小さいんだ。上手く発音出来ないのさ。」

バンバンとシナモンの肩を叩く。

「し、しかし……！！」

「邪魔するでえ！」

「お邪魔しますですわ。」

シナモンの言葉をさえぎる様に、レジの左横に飾ってあるフランス人形と日本人形が同時に手を上げる。

「あゝ 京子^{きょうこ}しゃん。蘭^{らん}しゃん。お久しぶりでしゅ。」

ユエルが手をブンブンと振る。

「うおっ！ 蘭と京子か！？ 意気なり動くでない！！ わしやあ、びっくりして心臓が止まるかと思っただわい。」

二体の人形がロククライミングの様に棚をよじ降りてくる。その後、玄爺の近くまで歩いてきた。

「ははは。爺さん、私には心臓なんて付いてないだろ！」

「そうですよ？ 私達は一応は神ですからね。簡単には死にません

わ。」

「ははは。と、笑うとフランス人形の蘭は辺りをキョロキョロと見回し始めた。

「ユエちゃんおはよう。元気にしてた？」

「うん。」

蘭とユエルが、ニコリと微笑む。その光景を横目に、京子が宴の準備をしているシナモンの元へと歩み始めた。

「ああゝら、シナモン君？ 貴方はお姉様達に挨拶はしてくれないのかしらあ？」

宴の準備をしているところを急に声を掛けられ、シナモンがビクツと身を縮こませる。

「あ、きよ、京子さん。お久しぶりです。」

「お・ひ・さ・し・ぶ・り。ではないでしょ？ 私達のお茶は？」

「は、はい。すぐに用意します。」

シナモンは京子の事が苦手なのか、目を合わせようとせず、テキパキとお茶の用意をはじめめる。

「もおう。どうしていつも、そんなそっけない態度をとるのぉ？」

お姉さんは悲しいわ。」

京子は、よよよ。と、その場にくず折れる。よく見ると、ちゃっかり右の袖を口^{そで}に咥^{くわ}えている。

ゴーン……ゴーン……

壁に掛けられた時計が、0：00を告げる鐘を鳴らす。

「を、時間じゃ。そろそろ皆が起き始めるかな？」

玄爺は壁に掛けられた時計に目をやる。

「を、やってるな。」

「私たちも交せてくださる？」 いつの間に来ていたのか、二人の老夫婦が宴会の準備をしている机の横へ立っていた。

「あ……。」

「私達も交せてえな。」

シナモンの言葉を遮るように、赤、青、黄色の服を着たピクシーの少女達が入ってくる。

「あ、はい。いいですよ。」

その言葉を待ってました。と、言わんばかりに、棚から次々と憑喪神が降りてくる。

「儂達も入ってええかの？」

沢山の憑喪神を代表するように、一人の福の神が口を開く。

「あ、はい。どうぞ。」

その言葉を聞き、ドツと皆から歓声が上がる。それまで静かだった宴会場が、急に賑やかになった。

「ああ……、皆飲みたいだろうから、開会の挨拶は飛ばすぞ。では、これより第2963回、春の大宴会を始める。」

壇上に上がった玄爺が泡の入った麦茶を掲げ、乾杯の音頭をとる。

『おおおおおおおつ』

その音頭に合わせ、憑喪神達が一斉にコップを掲げる。

『かんぱ〜い。』

ほら、耳を澄ませてください。あなたの家でも聞こえませんか？
憑喪神達の宴会の声が……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1890c/>

ほのぼの～新月の夜～

2010年10月8日15時41分発行